

令和7年度 平和推進事業報告書



令和7年8月5日(火)～6日(水)

愛知県海部郡飛島村

平和推進の村宣言

世界の恒久平和は、人類共通の願いです。
しかし、今日の世界情勢にみられるように、膨大な核兵器の存在が、世界の平和と人類の生存に大きな不安をもたらしています。

こうした状況のもとで、我が国は世界唯一の被爆国として、核兵器の廃絶を、世界に訴え続けなければなりません。

飛島村は、ここに、平和と国際協調を理念とする平和行政を推進し、＜安全で明るく心豊かな住みよい村＞の実現を念願して、「平和推進の村」を宣言します。

平成8年6月21日宣言

愛知県 飛島村

事業の経過

- | | |
|------------------|---|
| 平成7年7月31日
8月 | 戦後50周年事業として飛島中学校の生徒6名を広島市へ派遣
故佐野村長が津島市と海部郡の中学校22校に被爆した広島の瓦を寄贈 |
| 平成8年6月21日 | 「平和推進の村」宣言 |
| 平成9年7月下旬 | 平和推進視察事業として以後、毎年実施
飛島中学校生徒8名・引率3名（教諭2名、事務局1名）の計11名を1泊2日で広島市へ派遣 |
| 平成13年8月5日、6日 | 平和祈念式典（8月6日）にあわせて派遣日の変更 |
| 平成18年 | 事業名を平和推進事業とし、派遣人数を生徒6名、引率2名の計8名に変更 |
| 平成19年～
平成30年～ | 報告会を実施（海外派遣事業との合同報告会）
飛島学園文化祭にて、平和推進事業単独の報告会を実施 |

令和7年度

広島派遣

飛島村平和推進事業

事業のねらい

近年、戦争を知らない世代が人口の大半を占めるようになり、平和に慣れ、感謝する気持ちはおろか、真に平和を願うという思いが薄らいできている。人々を不幸に陥れる戦争を再び繰り返さないためにも、今日の平和が多くの犠牲の上に成り立っていることを見つめ直す必要がある。

この事業を通し、平和への願いをいっそう強め、今生きていることに感謝するとともに、学んだことを後世へ語り継ぐことが重要であり、平和に貢献できる人づくりを目指す。

引率教諭	
中野 倫子	
9年	
伊藤 世理夢	
太田 彩菜	
鬼頭 宗矢	
立松 透晃	
早川 明里	
山本 晃獅	



7月10日(木)

村長表敬訪問



広島出発を前に、派遣生徒は加藤村長を訪れました。学園全体で作成した千羽鶴を披露し、生徒たちは派遣への抱負を述べました。加藤村長から平和推進への取り組みや激励の言葉をいただき、派遣生徒一同は決意を新たにしていました。

参加生徒の抱負

伊藤 世理夢

平和を維持するにはどうすればよいか学びたい。

太田 彩菜

戦争の実感が湧かない人達に戦争の恐ろしさを伝えたい。

鬼頭 宗矢

歴史の授業ではわからないことを学びたい。

立松 透晃

平和の大切さがどのようなものか具体的に学習したい。

早川 明里

原爆ドームを目の当たりにしたとき感じたことを伝えたい。

山本 晃獅

戦争の悲惨さや現地だからこそ学べることを伝えたい。



7月17日(木)

事前研修会

生涯教育課

主事 梶浦 祐生

主事 山田 陽太

飛鳥学園

教諭 中野 倫子

参加生徒 6名

広島へ中学生を派遣する意味、飛鳥村の平和推進事業への取り組みの経緯や二日間の行程について生徒たちは説明を受けました。その中で、世界平和に貢献できる人づくりにかける村の方々の思いを受けとめた生徒たちの表情には、事前学習にしっかりと取り組み、多くのことを実習で学ぼうという決意がみなぎっていました。

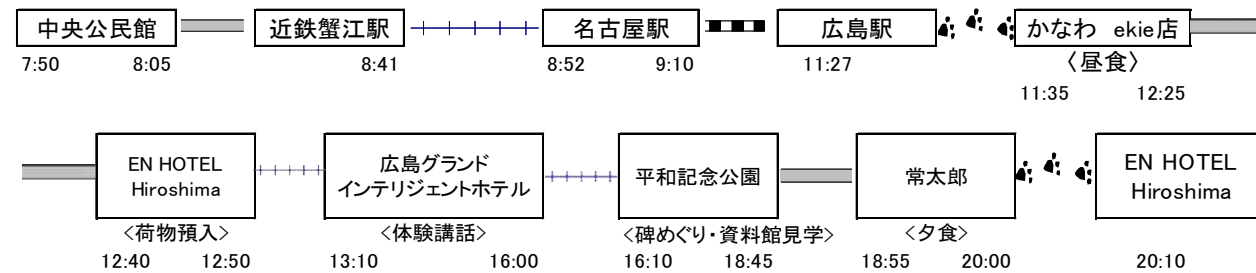
8月5日(火)

出発式

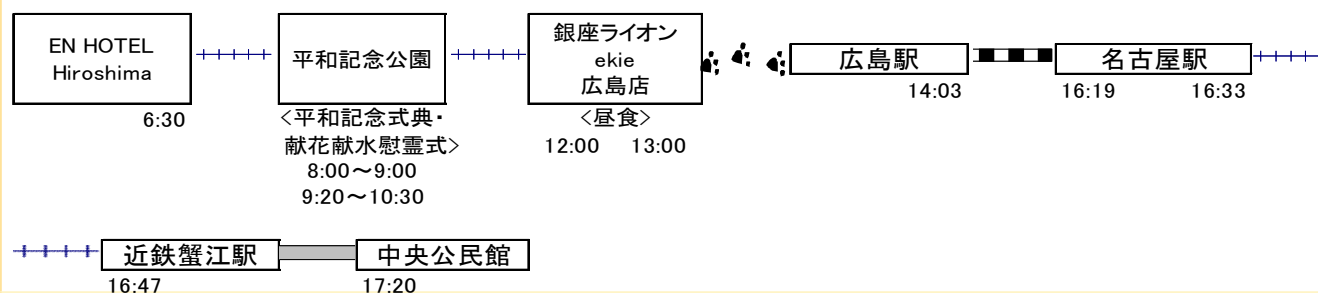


スケジュール

8月5日(火)



8月6日(水)



教育長あいさつ

記念式典への参加や被爆施設の見学、被爆者体験者の講話など、たくさんの研修予定がある。思わず目を背けたくなるようなことがあるかもしれないが、しっかり見て、聞いて、心で感じ、自分なりの戦争・平和・幸せについて考えてきてほしい。

教育長 萩野 登記代

生徒代表あいさつ

平和推進事業を通じて学習する機会をいただきありがとうございます。平和記念式典の参加や、語り部や被爆者の方の話や資料を見聞きし学び、平和の大切さ、戦争や原爆の恐ろしさを学んでいきたいです。

鬼頭 宗矢

平和記念公園内碑めぐり



語り部

広島被爆者援護会

内藤 達郎さん

平和の鐘

広島は悲願に立ち、すべての核兵器と戦争のない、まことの平和共存の世界の達成をめざし、建設されたものです。

鐘の表面には「世界は一つ」を象徴する、国境のない世界地図が彫られ、撞座（つきざ）には、原水爆禁止をこめて原子力マークが入れられています。このマークをつくことで、核兵器廃絶の世界を誓います。



原爆ドーム

原爆ドームは、世界で初めて使用された核兵器によって被爆した建物です。

もともとは、広島県産業奨励館という建物で、内務省や広島県の木材株式会社等の事務所として使用されていました。



韓国人原爆犠牲者慰霊碑

この慰霊碑は、原爆投下により亡くなった韓国人（朝鮮人）約2万人の犠牲者を供養するために建てられました。

亀をかたどった台座の上に碑柱が建ち、その上には双竜を刻んだ冠が載せられています。これは、死者の霊は亀の背中に乗って登っていくという故事に由来しているそうです。





原爆死没者慰霊碑

中央には原爆死没者名簿を納めた石棺があります。現在 123 冊ある名簿のうち 1 冊は「原爆被災者氏名不明者多数」と書かれた白紙の名簿で、多くの名前も分からない死没者の方のためのものです。

また、石棺の正面には、「安らかに眠ってください 過ちは繰返ませぬから」と刻まれています。

真ん中に見える平和の灯は、地球上から核兵器がなくなるまで、常に燃やされています。平和記念式典が行われる 8 月 6 日は灯が大きくなります。



原爆の子の像

モデルとなった佐々木禎子さんは、白内障を患い、闘病生活の中で、病気が治ると信じて薬包紙などで鶴を折り続けました。

佐々木禎子さんをはじめ、原爆で亡くなった多くの子どもの霊を慰め、世界に平和を呼び掛けることを目的として建立されました。

像の真下の石碑には「これはぼくらの叫びです これはわたしたちの祈りです 世界に平和をきずくための」と刻まれています。



平和学習



語り部

広島被爆者援護会

小野 久仁子さん

原爆が投下された当時、小野さんの家族が体験されたこととお話いただきました。

…倒壊した自宅をあとに、祖父の家がある山間部に向け歩き始めた。あたりは男女の違いすらわからない死体の山だった。

祖父の家にも、大きな衝撃と強い閃光は伝わった。市街地に立ち込めるキノコ雲にあぜんとしていると、晴天にもかかわらず雨が降り出した。気づけば、収穫した桃が真っ黒に染まっていた…

原爆が投下された時のことを、体験談を語り継がれている方の言葉で聞くことで一層当時の様子が想像できました。

また、自身の原爆の後遺症についてや、出征した父親が、戦地の環境が原因で結核に罹患し苦しめられたことについてなど、戦争による被害が終戦後も続いていたことについても詳しく聞かせていただきました。



原爆資料館見学



2016年に現職アメリカ大統領として初めて広島平和記念式典に参列したバラク・オバマ氏が作成した2つの折り鶴が展示されています。

メッセージには「私たちは戦争の苦しみを経験しました。ともに、平和を広め核兵器のない世界を追及する勇気を持ちましょう。」と書かれています。



建物疎開作業現場では多くの犠牲者が出たそうです。

被爆した当時12~14歳の3名の中学生の制服を一体にして展示されていました。

とてもぼろぼろで原爆の威力やその場の壮絶さを感じました。

8月6日(水)

平和記念式典

平和への誓い

いつかは訪れる、被爆者のいない世界。
同じ過ちを繰り返さないために、多くの人々が真実を知る必要があります。
原子爆弾が投下されたあの日のことを、思い浮かべたことはありますか。

昭和20年(1945年)8月6日 午前8時15分。
この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。
誰なのかわからないくらい皮膚がただれた人々。
涙とともに止まらない、絶望の声。
一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。

被爆から80年経つ今、
本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、
直接話を聞く機会は少なくなっています。
どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、
記憶として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。

世界では、今もどこかで戦争が起きています。
大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。
その事実を自分のこととして考え、平和について関心をもつこと。
多様性を認め、相手のことを理解しようとする事。
一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、
傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはず。
周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、
いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。

One Voice.

たとえ一つの声でも、学んだ事実思いを込めて伝えれば、
変化をもたらすことができるはず。
大人だけでなく、子どもである私たちも平和のために行動することができます。
あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、
私たちが、被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、
平和を創り上げていきます。

令和7年(2025年) 8月6日

子ども代表
広島市立皆実小学校 6年 関口 千恵璃
広島市立祇園小学校 6年 佐々木 駿

献花・献水慰霊式



生徒代表平和への誓い

原爆が落ちた広島を訪れ、平和について知り、考え、学ぶ今、私はこの場所が持つ深い歴史と重みを静かに受け止めています。遠い過去の出来事だと思っていた原爆投下が、実際には私たちの生活にもつながる現実であることを、ここに立って改めて実感しています。

平和とは何か、戦争はなぜ起こったのか。私はまだ多くのことを学んでいる途中ですが、この機会を通じて自分の中に新たな問いや関心が芽生えました。これからその考えを、一つずつ自分なりに見つけていき、学園の後輩や友達、地域の方々に伝えていきたいです。

今、私たちは平和な毎日を過ごしています。朝起きて、学校へ行き、友達と笑い合う。そのようなかけがえのない日々は当たり前のように思えて、本当はとても大切な時間なのだとこのことを、この広島で実感しています。戦争は、人の命だけでなく、家族や夢、日常のすべてを奪います。私は、今ここにいるすべての人の静かな祈りが、「二度と同じ過ちを繰り返さない」という強い決意の表れだと思います。だからこそ、私たちはこれからもっと学び、自分なりに平和について考え、行動に変えていきたいと思っています。私たちにはまだたくさんできることがあります。いまからでも遅くはありません。

そして、今年で戦争が終わってから 80 年になりました。私たち人類全ての人々は核兵器と共存することはできません。自分たちと同じ苦しみや悲しみを経験させてはならないという被爆者の思いを受け止め、引き継いでいく意志と営みが、この若い世代に求められている物だと思っています。

最後に、学園の生徒代表として、そして同じ時代を生きる若者の一人として、私は人を思いやる言葉や態度を大切に、争いのない社会を築くために行動していくことをここに誓います。原爆そして戦争で命を失ったすべての方々に哀悼の意を捧げ、これからの未来が平和で小さな争いごとくも起こらない世の中になることを祈っています。

立松 透晃

解散式



教育長あいさつ

2日間を通して、学校で習っただけ、教科書や資料で見ただけのことが、自分のこととしてとらえることができたと思います。また、戦争の悲惨さがわかり、平和の大切さがわかったと思います。今回広島で聞いたこと、見たこと、そして心で感じたことを、自分の言葉で身近な人に伝えていってください。

教育長 萩野 登記代

生徒代表お礼の言葉

教科書では学べないことを施設で学び、被爆者の方からは直接話を聞き、原爆の恐ろしさや、広島が平和のために行っていること、被爆者の方が思っていることを学ぶことができました。講師の方々の強い思いを感じ、これからの生き方や自分に活かしている体験をたくさんできました。今回体験できたことに感謝し、学園や周りの人に伝えていきたいです。

早川 明里

テーマ：原爆と身近な繋がり

9年 A組 伊藤 世理夢



タイトル：8月6日のあの日

私が原爆ドームを最初に見た時に思ったのは、今の平和な日本と比べて恐ろしい建物が残っており、当時の広島に何があったのか想像しました。原爆は人間だけでなく建物ですら壊してしまうことがわかりました。



タイトル：想像できない死者

私が原爆資料館で見た写真の中で驚いたのは、数えきれないほどの死んでしまった人の骨です。もし自分がその場にいたらと考えるとすごく悲しい気持ちになりました。骨になってしまったら誰か分からなくなってしまうのでせつなくなりました。



タイトル：家族

私が資料館で見た写真の中に、家族をなくしてしまって泣いている子を想うお母さんの写真がありました。大切な家族もなくしてしまう原爆を考えると、本当にこれから先原爆を使ってもいいことが一つもないことが想像できました。

感想

私が今回、広島に行って、実際に建物や写真を見て、命の大切さや原爆を使うと昔のようにすべてが壊されてしまうことがわかりました。だから広島で学んだことを次の世代につなげていき、二度と原爆を使わないようなよりよい平和な社会になったら私はうれしいです。

テーマ：未来に伝える広島

9年 A組 太田 彩菜



タイトル：投下された原爆

1945年8月6日8時15分、広島に投下されたリトルボーイには約50kgのウラン235が搭載されていた。この1発の爆弾によって、建物が焼かれてしまった。人々は道に倒れて、川には浮いている人もいた。



タイトル：変わってしまった広島

原爆が投下され、たくさんの方が亡くなった。道に倒れている人が「助けてください」「死んでもいいから水をください」と言っていたそうだ。助けたくても助けられない罪悪感が今でも心に残っていると知り、実際に起こったことだと実感した。



タイトル：平和の灯

平和の灯は、核兵器の廃絶と世界の恒久平和を願う象徴として、1964年からずっと灯され続けている。この火は、核兵器が地球上から姿を消すまで燃え続けるとされている。雨が降っても消えないと知って、人々の強い思いが感じられた。

感想

私は、広島派遣に行く前は、戦争が起こることに実感が湧いていませんでした。しかし、戦争を実際に体験した方々から話を聞いたり、資料館に行ったり、広島平和記念式典に参加したりしたので戦争についてよく知ることができました。戦争を実際に体験した方々から話を聞いたとき、当時の様子が想像でき、人々が助けを求めているにも助けられない苦しみを感しました。今回学んだことを周りの人に伝えていきたいです。

テーマ：被爆者の人の思い



9年 A組 鬼頭 宗矢

タイトル：原爆の恐ろしさ

1945年8月6日午前8時15分。広島に原爆が落とされました。空襲警報が解除され、普通の生活を送っていた広島の街が一瞬にして壊れてしまいました。僕は実際に広島に行き、原爆がどれほど恐ろしいものなのかが分かりました。



タイトル：今の広島

広島は原爆が落とされてからの80年間少しずつ復興していき、今ではこのようにビルがたくさんある中国地方の地方中枢都市にまで発展しました。みなさんも広島に行く機会があれば昔の人が頑張って復興させた広島も見てみてください。



タイトル：平和とは

広島に行って原爆や戦争の悲惨さ以外にも平和がどれだけ大切なことかも知ることができました。僕は平和とはだれもが幸せに生きることができる世界だと思います。そのためには相手の気持ちをしっかりと思いやることが大切です。みんなで相手を思いやることができれば、世界は平和になると思います。

感想

原爆はたくさんの人の命を奪い、たくさんの人の心に深い傷を刻みました。僕は実際に原爆ドームや平和記念資料館に行き、原爆の悲惨さを学びました。平和記念資料館では、当時の人が実際に着ていた服や熱風によって焼けてしまった弁当などを見て、今の日本では考えられないような出来事が本当に起こったんだと痛感しました。そして今後このようなことを絶対に起こしてはいけなさと感じました。しかし、戦後80年がたち、被爆者の人が10万人以下になってしまい、直接お話を伺うことは難しくなっているため、僕たちが地域の人に伝えていきたいと思っています。

テーマ：世界恒久平和を実現するために

9年 B組 立松 透晃



タイトル：現地を訪れることの重要性

私には何ができるのか。平和はどうやって成り立っているのか。たくさんの疑問があった中、広島でたくさんのことを学び、考え、“平和”の真の意味を知ることができました。また、平和について見つめ直す良い機会になり、たくさんの人々にこの出来事を鮮明に継承していく必要性を知りました。



タイトル：平和を希求する大切さ

私たちと同じ若い世代が戦争に巻き込まれ学校に行き、授業を受けることさえもできない日々が日本にはあった。まだ今も世界のどこかで戦争をしている国がある。普通の人間として生きることができていない人々がいる。そんな他愛のない生活をいとも簡単に奪ってしまう戦争をなくし、世界恒久平和が実現するために小さなことでも行動していきたいです。



タイトル：80年前の惨禍

80年前の広島に落ちた一発の原爆。その影響は熾烈であった。建築物への影響はもちろん、人々の身体への影響が悲惨で、道端には数え切れない程の人々が横たわって、「助けてほしい」「幾らかの水がほしい」という声が飛び交っていたことを知り、同じ過ちは繰り返してはいけないと強く思いました。

感想

今回の平和推進事業を通じて、広島で原爆ドームや平和記念資料館を訪れることで、戦争の切なさを強く感じました。被爆者の方のお話を聞き、命の大切さや平和の意味を深く考えることができました。そして原爆の被害がどれだけ大きかったかを知り、心が痛みました。「平和はあたり前じゃない」と改めて思い、未来のために自分にできることを一つずつしていきたいです。広島で得た教訓を胸に、日々の生活をより大切に過ごしていきたいです。

テーマ：今、私たちにできること

9年 B組 早川 明里



タイトル：家族を失って

1つの原子爆弾は一瞬にして人々の生活と命を奪った。家は壊れ、目は見えない。何が起こったのかも分からず苦しみながら亡くなる人たち。性別も分からないくらいの大やけどを全身に負った人たち。どれが自分の家族なのかも分からないのはとても苦しかっただろうと思った。



タイトル：罪悪感と無力感

生き残っても「助けて」「水をください」という言葉が周りから絶えず聞こえる。自分も逃げているから助けてあげられない。我が子や両親を助けてあげられなかった罪悪感や申し訳なさを抱えながら生きてきたようだ。



タイトル：平和への願い

お互いを認め合い、分かり合い、受け止める。感謝を言葉で伝える。そうすることで相手が安心し自信がつく。それが平和への近道だ。一人一人の知恵と努力と勇気で核兵器をなくし、地球上から核兵器がなくなことを願い、ついでに「平和の灯」を1日でも早く消すことが平和への願いだと聞いた。

感想

広島での研修は、とても内容が深く、平和について考え直す2日間だった。原爆ドームを目の当たりにした時や講話を聞いた時はあまりの衝撃に言葉を失い、思わず涙が出てしまうこともあった。改めて、戦争がどれだけ悲惨なものか、また、家族や友達と過ごしている今がどれだけ幸せであるか感じる事ができた。教科書の中だけでは計り知れない悲しくつらいものを1人でも多くの人に伝え、身近にある何気ない日常がとても幸せなことだと知ってもらいたいと強く思う。

テーマ：原爆による被害

9年 B組 山本 晃獅



タイトル：戦後の広島

この写真は戦後の広島県物産陳列館。原爆ドームです。この頃、原爆が投下され町は、建物の破片やがれきで崩壊してしまいました。住む場所も食べるものもなく、人々はただ苦しみ亡くなっていく人ばかりでした。この写真はそんな原爆の恐ろしさについて知ることができる一枚だと思います。



タイトル：死の斑点

死の斑点。それは原爆の放射線により、細胞が活発に分裂する骨髄やリンパ管等の組織に大きなダメージを与えることで出るもの。原爆投下により、このような症状が出る兵士が多出しました。この斑点が出た者は死が近いというサインでもあったため、当時恐れられていました。



タイトル：血の付いた服

この服は当時の子供が着ていた服です。この服には着用していた子の血と思われるものが付いています。1か所だけでなく、数か所にわたり血痕がありました。それだけでなく、服は破れちぎれていたり、焼け焦がれていたりしているものもありました。私たちが普段着ているものでは考えられないほど残酷でした。

感想

私はこの広島派遣を通して、戦争、原爆についてより知ることができたと思いました。広島で実際どんな被害があったのか詳しく知らなかったです。でも、広島に行ったことで、原爆が投下されたことによって、次にどういう被害が起きたのかを知ることができました。

原爆投下に関する資料編

原爆投下前後の動き

1945年

- 7月16日 — 人類史上最初の核爆発実験実施（アメリカ・ニューメキシコ州アラモゴード）
 - 16日 — アメリカ重巡洋艦インディアナポリス号、マリアナ諸島テニアン島へ向けてサンフランシスコ出航（ハワイ経由）積み荷は広島へ投下予定の原子爆弾のための核分裂物質ウラン 235 と爆弾の一部（その他、ウラン 235 や爆弾の部品なども幾つかに分けて空輸）
 - 25日 — 原爆投下命令（アメリカ陸軍参謀本部からグアム島の戦略航空隊司令官あて）
 - 26日 — 米英中三カ国名で、日本の無条件降伏を求める「ポツダム宣言」を発表
 - 28日 — 日本政府は、ポツダム宣言を「黙殺する」と発表
- 8月 2日 — アメリカ陸軍第20航空軍野戦命令13号（8月6日 日本攻撃、第1目標広島市街地工業地域）
- 8月 5日 21:20 警戒警報発令
21:27 空襲警報発令
23:55 空襲警報解除
- 6日 0:25 空襲警報発令
0:37 爆撃目的都市の天候を確認するため、テニアン島から偵察機3機が広島、小倉、長崎各都市へ向けて出発（日本時間）
1:45 B29爆撃機「エノラ・ゲイ」号、原子爆弾を搭載してテニアン島を出発（日本時間）この爆撃機には、爆撃の破壊力の測定機材を投下する1機と写真撮影のための1機が同伴
2:10 空襲警報解除
2:15 警戒警報解除
7:09 警戒警報発令（1機のB29（原爆投下のための天候観測機）が広島市上空に侵入）
7:31 警戒警報解除
8:15 警報が市民に知らされる前に、原爆が投下され、さく裂
- 9日 11:02 長崎に原子爆弾を投下
- 10日 — 日本政府が「新型爆弾は国際法違反」と抗議声明
- 14日 — 日本政府、ポツダム宣言を受諾し、連合国に無条件降伏
- 15日 — 日本政府、国民に戦争終結の詔書放送

投下目標にされた都市

1945年のアメリカ側の動き

- 4月 — 原爆投下を研究する地域を次のとおり選定
東京湾、川崎、横浜、名古屋、大阪、神戸、京都、広島、呉、八幡、小倉、下関、山口、熊本、福岡、長崎、佐世保
- 5月 — 投下目標を京都、広島、新潟にしぼる
- 6月 — 投下目標から京都を除き、小倉、広島、新潟に目標を設定
- 7月25日 広島、小倉、新潟、長崎に決定
- 31日 広島を最優先目標に設定
- 8月 1日 目標から新潟を除外
- 2日 攻撃日を6日、投下目標を広島、小倉、長崎とする最終命令
- 6日 広島に原爆投下
- 9日 長崎に原爆投下

広島に投下された理由

戦争末期、日本の主要都市はアメリカ軍の空襲でほとんど壊滅状態でした。そのなかで、原爆投下目標として広島が選ばれたのは、次のような理由からと推測されます。

- ①都市の大きさや地形が、原爆の破壊能力を実験するのに適当であり、同時に原爆投下後の破壊効果を確認しやすかったこと。
- ②軍隊、軍事施設、軍需工場などが集中し、しかも無傷であったこと。

原爆投下までの経路

広島へ原爆を落とすために、テニアン島から B29 爆撃機「エノラ・ゲイ」号が飛び立ちました。テニアン島から広島までは、約2,740 kmで片道6時間30分の飛行でした。

——編集後記——

戦後 80 年目を迎えた今年、平和推進事業も 31 年目を迎えました。

本事業は、飛島村の将来を担う「人材育成」のため、生涯学習の一環として、学校以外の教育の場でこれからの生き方を考え、平和の願いを後世に伝えていく事が大きなねらいとなっています。

現地広島において、幼少期に実際に被爆された方など、お二人の貴重なお話を伺った後、平和記念資料館の見学や平和記念式典へ参加し、派遣された中学生にとって非常に意義ある研修となったと思います。

その内容については、それぞれの生徒が見て・聞いて・感じて・考えたことを本書に綴っています。

この事業が生かされ、今後、より平和な世界になるようお願い、結びとさせていただきます。

発行日：令和7年12月

令和7年度 平和推進事業報告書

●発行／飛島村教育委員会

●発行部数／180部